

# 古代語における極度・高度を示す程度副詞の機能と体系

中 川 祐 治

## 一、はじめに—本稿の目的と立場—

本論文は、極度・高度を示す程度副詞<sup>1</sup>群、「いたく」「いみじく」「ことに」「よに」「いと」「まことに」「げに」を取り上げ、これらの各語が、古代語、即ち、上代、中古の日本語において、どのような機能を有し、その包括としての極度・高度を示す程度副詞の体系全体がいかに構築されていたのかについて、これらの語の間にもみられる相互承接、語順を記述的に実証することによって示そうとするものである。そのための手段として、各時代の、主に和文資料を用い、記述的・網羅的に考察を加えるものとする。

副詞は従来からその研究の遅れが指摘され、「品詞論のはきだめ」<sup>2</sup>とも称されてきた<sup>3</sup>。それは、副詞に形態的な特徴がみられないことと、他の品詞から派生したものが殆どであることなどによると考えられる。また、構文論の立場に立つても、その機能は連用修飾とい

ったこれまた「構文論のはきだめ<sup>4</sup>」であって、これらのことから同一の語が辞書によっては副詞とされていたりいなかったりといったねじれの現象が生じているのである。

即ち、副詞について論ずる場合には、所謂辞書における副詞に限定せず、山田（一九三六）の如く、感動詞、接続詞と一括して副用語として捉え、その機能は、渡辺（一九七二）の如く、程度副詞を用言連用形、体言＋連用助詞と一括して連用修飾と捉える必要がある。即ち、品詞論においては感動詞、接続詞と連続し、構文論においては連用修飾として、用言連用形、体言＋連用助詞に連続する。本稿の立場も基本的にこれに従うものである。副詞をこれだけが副詞だと限定できない所に副詞研究の困難さがあるのであるが、逆に言えば、日本語の副詞の本質がここにあるとも言えるのである。

また、語には語彙の意味と文法的機能の両面があることは広く知られている所であるが、副詞には語彙的な意味が見出しにくい語が

多くみられる。後述するが、例えば、本稿で考察の対象とする「いと」は上代の「痛」といった語から派生したと考えられるが、中古においては「痛」といった語彙的な意味、ニュアンスは薄れ、単に程度の甚だしさを強調的に修飾するといった文法的機能のみを有する語へと変遷を遂げる。「げに」においてもその語彙的な意味は見出しにくい。このような実質的な語から機能的な語へという変遷は副詞一般に見られる特徴である<sup>5)</sup>。

以上の点をふまえ、本稿では、極度・高度を示す程度副詞群として、辞書的には副詞とされていない語もその考察の対象とする。これは、先程の派生という点からも副詞の史的研究においては広く考察の対象とすることが必要であり、また体系全体を包括的に捉えるといった点からも重要であると考えられるためである。

## 二、上代における機能

ここでは、『古事記』『万葉集』を資料として考察を加える。「いたく」「いみじく」「ことに」「よに」「ごと」「まことに」「げに」の『古事記』『万葉集』における用例数を纏めたものが下の表1である。

### 二、一 「いたく」「いと」

上代の「いたく」「いと」については、井上(一九九四)、山口(一九九二)の論考に詳しい<sup>7)</sup>。井上によれば上代の「いたく」「いと」

表1 「古事記」「万葉集」における用例数

	いたく	いみじく	ことに	よに	いと	まことに	げに
古事記	20	0	2	0	19	11	0
万葉集	26	0	3	4	13	18	0

た「いと(Ⅱ甲類)」は、井上のいう第二段階の程度を示すという<sup>8)</sup>。

1 わが妻はいたく(伊多久)恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず  
(万葉集四三三二)

2 天の河いと(伊刀)川波は立たねども  
伺候ひ難し近きこの瀬を  
(万葉集一五二四)

しかし、これが「いと(Ⅱ乙類)」になると、第三次段階の程度。へと進み、純粹に程度のみを示すようになるという。

3 霍公鳥いと(伊登)ねたけくは橘の花  
散る時に来鳴き響むる(万葉集四〇九二)  
4 わが屋戸の萩咲きにけり秋風の吹かむ  
を待たばいと(伊等)遠みかも  
(万葉集四二一九)

これら乙類の「いと」は、それぞれ「わたし」「遠し」の状態の程度が「非常に」であることのみを示し、甲類の「いと」がもつ「いた」の原義を完全に払拭しているという。また、中古の「いと」は本質的にこの乙類の「いと」の意味で

あるという。

また、山口によれば、甲類の「いと」は、

- 5 白波の寄せる浜辺に別れなばいと（伊刀）も為方なみ八  
遍袖振る（万葉集四三七九）

- 6 国国の防人つどひ舟乗りて別るを見ればいと（伊刀）も  
為方無し（万葉集四三八二）

のように「伊刀もすべなみ」「伊刀もすべなし」といった慣用的な用法がみられ、これは「いた（甚）」の用法と極めて似ているという。つまり、「いと（＝甲類）」と「いた」「いたく」はその原義「痛し」とのつながりを完全には失っておらず、その意味合いは否定的であり、そのため否定辞と共に用いられるとする<sup>10</sup>。これが、乙類の「いと」になると、「痛し」との訣別を果たし、意味的にも中立的な語として用いられるようになったとする点は井上と変る所がない。

## 二、二 「いと」と

「いと」とは、『古事記』では2例、『万葉集』においては3例用いられている。

- 7 故別遣二天迦久神二可レ問。（カレコトニアメノカクノカミ  
ヲツカハシテトフベシ）（古事記上巻四三三）
- 8 各異作二假宮二而宿。（オノモオノモコトニカリノミヤヲツ  
クリテヤドリマシキ）（古事記下巻二五）

9 紫草を草と別く別く伏す鹿の野は異に（殊異）して心は

同じ（万葉集三〇九九）

- 10 椽の解濯衣のあやしくも殊に（殊）着欲しきこの夕かも  
（万葉集一三二四）

用例7は「特別に」の意味で、8は「別々に」の意味で用いられ  
た例、9は「異なる」の意味を強く有し述格に立つ用例、10は「着  
欲しき」の程度を強調する程度副詞としての用法である。

このように「ことに」は、「異（殊）」といったサマ的な性質を  
持ちつつも、既に、程度副詞としての定着もうかがわれ、形容動詞  
と副詞の両方の性質をあわせもつ（混沌とした）中間的な語であっ  
たということが出来る。「ことに」は、時代が下るに従い、「殊に」  
といった限定副詞（取り立て副詞）の用法と「異なる」といった動  
詞としての用法とに分化するが、上代においては未だ混沌としてお  
り<sup>11</sup>、明確な機能分化を認めることは難しい。

## 二、三 「よこ」

「よこ」については、『万葉集』において4例みられる。

- 11 わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に（余  
爾）忘れず（万葉集四三三二）
- 12 海少女潜き取るといふ忘れ貝世にも（代）二毛）忘れじ妹が  
姿は（万葉集三〇八四）

13 足柄の土肥の河内に出づる湯の世にも(余余母)たよらに兒ろが言はなくに(万葉集三三六八)

14 筑波嶺の岩もどろに落つる水世にも(代余毛)たゆらにわが思はなくに(万葉集三三九二)

このように上代の「よに」いずれも否定辞と呼応して、「世に」(「なし」)の形で、「この世の中にない(しない)」といった語彙的な意味(世の中)で用いられていた語であったとみることが出来る。

## 二、四 「まこと」

最後に、「まことに」の用例についてみておきたい。上代の「まことに」の用例は「まこと」としての用例である<sup>12</sup>。

15 葛師の真間の手兒奈をまこと(麻許登)かもわれに寄すとふ真間の手兒奈を(万葉集三三八四)

16 聞くが如まこと(眞)貴く奇しくも神さび居るかこれの水島(万葉集二四五)

17 世間はまこと(信)二代は行かざらし過ぎにし妹に逢はなく思へば(万葉集一四一〇)

このように、上代においては「まこと」の形で用いられていた。「古事記」一一例、「万葉集」一八例の内、名詞として用いられているものは、15を含め四例しか見当たらず、上代にあつては「まこと」の形で副詞として用いられていたと考えられ、早い段階から副

詞指向の語であつたことが窺われる。そして、これが中古になり、名詞「誠」との区別をなすために副詞的語尾「に」を付属して、「まことに」として分化し定着したと考えられる。

また、その機能は、①形容詞の直前に置かれ、その程度を限定・修飾する(用例16など)「古事記」一例、「万葉集」四例の計五例、②用例17のように後続する「二代は行かざらし」命題全体(コト)に対する主観的な判断を加える(「古事記」一〇例、「万葉集」一例の計二一例)、の二つが挙げられる。これは現代語へと続く「まことに」の特徴であり、早い時期からこの「まこと」(に)の基本的な性質は成立していたと考えられる。

以上のように、上代にみられる極度・高度を示す程度副詞は、いずれも語彙の意味が認められやすいのが特徴である。

## 三、中古における機能

まず、中古における各語の用例数、使用状況について纏めると表2のようになる。

## 三、一 「いたく」

中古の「いたく」は、上代の「いたく」の性質を基本的に引き継ぎ、主に、否定的な意味合いを持つ動詞を修飾する用例が圧倒的に多く、動詞以外の形容詞・形容動詞の程度を修飾する用例は殆ど存しない<sup>13</sup>。

表2 中古における作品別用例数

	いたく	いみじく	ことに	よに	いと	まことに	げに
竹取物語	8	8	1	11	31	3	1
伊勢物語	11	3	2	2	67	1	0
土左日記	6	0	0	0	17	2	2
大和物語	17	21	4	5	187	2	0
平中物語	6	9	4	7	49	3	5
宇津保物語	51	207	98	55	1813	34	149
蜻蛉日記	29	48	10	9	436	2	19
落窪物語	29	105	13	12	627	15	42
枕草子	41	303	23	15	450	67	43
源氏物語	366	450	264	107	4237	150	458
和泉式部日記	6	9	3	0	68	4	7
紫式部日記	8	14	15	3	148	5	6
堤中納言物語	15	39	4	1	136	8	2
更級日記	3	76	4	0	95	3	7
高松中納言物語	12	239	44	1	412	42	54
夜の寝覚	61	286	32	30	809	42	123
狭衣物語	63	130	52	25	658	82	187
計	732	1947	573	283	10240	465	1105

1 女はいたう泣きけり。(伊勢物語)

2 ふなきみれいのやまひおこりて、いたくなやむ。(土左日記)

3 おなじ季繩少将、病にいたうわづらひて、(大和物語)

4 いたいたくよるこひてのたまふ、(竹取物語)

このように「いたく」は、前時代と同様に、修飾する語、動詞が固定化されており、「降る」「泣く」「悩む」「吹く」といった語を修飾しやすい。しかし、全体の一割程度ではあるが、用例4のようにプラスのイメージの語をも修飾することから、上代の「いたく」にみられたような「痛」に起源する絶対的な否定のイメージは中古では薄れ、肯定、否定の両方に跨る中立的な性質を持つようになってきたとみることができる。

また、この「いたく」と「痛」との結びつきが中古には薄まっていることは、形容詞「痛し」として(「痛い」の意味で)用いられることが少ないことから窺える。例えば、「源氏物語」では、終止形で述格に立つものが六例、未然形0例、連体形七例、已然形一例であり、主述関係の中で用いられる「痛し」は連用中止の四例を含めても僅かではなくなり、「いたく」の形で程度修飾を行う(「痛い」の意味ではなく、程度の甚大さのみを示す語としての)用例三六六例と比べて圧倒的に少ない。このように中古の「いたく」は「痛」という語彙の意味を内包しつつも、程度の甚大さを示すといった文法的機能を有する程度副詞として多く用いられていたことが窺える。

### 三、二 「いみじく」

次に、「いみじく」の用例をみる。

5 たくみ羅、いみしくよろこひ、(竹取物語)

6 又の日も、いみじく雪降り荒れて、(更級日記)

7 この山いみじうおもしろきほどなり。(蜻蛉日記 下)

8 いみじうかなしきに、(紫式部日記)

このように「いみじく」は、形容詞、形容動詞、動詞に限定せず、その程度を限定・修飾する。この点で「いたく」と異なり、また、「いたく」がその本質において負の語感を持ち、否定の印象を持つ語と結び付くことが殆どであったのに対し、「いみじく」にはそういった正負の印象の違いによる語の結び付きの差もみられず自由に用いられる。

また、「いたく」が中古ではその語彙的意味(痛)が表面に現れず、殆どが程度修飾語として機能していたのに対し、「いみじく」は比較的、屬性(忌)を保持し、「大変なことである」といった包括的な表面的意義を有し<sup>14</sup>て、終止形「いみじ」の形で述格に立つことも多い<sup>15</sup>。

この点から、形容詞連用形と程度副詞が連続するにおいて、「いたく」はより程度副詞よりの語、「いみじく」はより形容詞よりの語として位置付けることが可能であろう。

### 三、三 「こと」

「こと」は「殊に」「異に」の字が当てられるように、「とりわけ」「他とは違って」といった視座から程度修飾をなす語であって、語彙的意味を抽出しやすい。そのため、「異なる」の意味で、「ことなり」の形で述格に立つ用例や「こと」の形で連用中止で述格に立つ用例もみられ<sup>16</sup>、形容動詞としてのサマ的な性質と程度副詞としての性質を併せ持つ中間的な語として位置付けることが可能である。このことは、現代語において古代語の「こと」が一方では副詞「殊に」に、他方では動詞「異なる」へと分化を遂げたことから認められよう。以下に用例を挙げる。

9 ことにおもはねど、行けばいみじういたはり、(大和物語)

10 その院の桜ことにおもしろし。(伊勢物語)

11 殊にけざやかなる、物のはえもなきやうなれど、

(源氏物語 竹河)

12 ことに人のとりわきてほめぬ所よ(落窪物語 卷二)

13 殊に、いと、親しきことはなかりけるを、

(源氏物語 夢浮橋)

「こと」の機能は、「他とは違って、際立って」といった観点からの限定、取り立てであり、このため、動詞、形容詞、形容動詞、名詞、副詞といった品詞の別なく、その直後の語を取り立ててその程度を限定する。

「よに」は本来『万葉集』の用例にみられたように、否定辭と共に起して「世の中になほほど(…)」といった観点から程度修飾を行う語であった。そのため、中古に入っても、「世になく」といった形で程度修飾を行う用例は勿論のこと、「世になし」という形で述格に立つ用例もみられる。

14 かたちの世に、すめてたきことを、(竹取物語)

15 このちこのかたちけうらなる事、世になく、(竹取物語)

16 又の夜の月、よにしらさおもしろきに、(平中物語)

17 箏の琴をよにをかしく弾き給ひければ、(落窪物語 卷一)

用例14と15は「竹取物語」からの用例であり、「世の中に並べ比べる人もないくらい美しい」といったように文の表現する命題内容としては殆ど差がなく、このように連用修飾格にも述格にも立つ。よって、中古においては「世の中になほほど(…)」といった形での程度修飾の用例が圧倒的に多く、「よに」単独で程度修飾する用例(17など)は一割弱程度しかみられない。つまり、中古では「よに」は未だ「世の中になほほど(…)」といった「よに」のもつ語彙的意味(世の中)が強く現れた、具体的なレベルでの修飾が主であり、「よに」単独で程度副詞として機能する段階には完全には至っていないと考えられる。

中古の「いと」は前時代に有していた「痛」との結びつき、甲類、乙類の区別をなくし、形容詞・形容動詞の状態、程度を純粋に限定・修飾する程度副詞へと変遷を遂げる。

18 三すんはかりなる人、いとうつくしうてゐたり、(竹取物語)

19 いとつれづれに、世の中のうらめしきことのみ思へば

(平中物語)

井上(前掲)によれば、中古における「いと」は形容詞・形容動詞の意味、語感、活用形の別なく、その程度を修飾し、動詞的なるものを修飾する場合にも情感的なものしか修飾せず、時間的発作性、推移性をあくまでも拒否する所にその特性があり、さらに、被修飾語の直前に位置するという厳密さを持つという。

これらの点から、「いと」は最も典型的な程度副詞であり、古代語における純粋な意味での唯一の高度・極度を示す程度副詞であるということが出来る。

### 三、六 「まことに」

「まことに」は「まこと」の形で既に上代からその用例がみられ、「まこと(に)」はかなり早い段階から副詞指向の語でありつたと考えられる。

20 まことにをかしげにぞ侍るなる。(堤中納言物語)

21 まことに、その方を取り出でん選びに、かならず漏るまじきは、いと難しや。(源氏物語 帚木)

これらから、中古における「まことに」の機能・用法は、①形容詞(形容動詞)の直前に置かれ、その属性の程度を修飾する(用例20)、②文頭や或は主題(主語)に先行して、命題、文全体を修飾する(用例21)、の二つに大別できる<sup>17)</sup>。

### 三、七 「げに」

「げに」は上代にはその用例がみられず、表2からも分かるように中古の初期においてはそれほど多くみられない。

22 かくおもふも、げに、をこがましく、うしろめたきわざなりや。(源氏物語 夕顔)

23 げに、この調べは、珍らしき手なりけり。(宇津保物語)

24 宮は、「げに」と思すに、(源氏物語 宿木)

以上から、中古における「げに」の機能・用法は、①形容詞(形容動詞)の直前に置かれ、その属性の程度を修飾する(用例22)、②文頭や或は主題(主語)に先行して、命題、文全体を修飾する(用例23)、③話者の主観性が強く現れる間投詞(応答詞)的な用法(用例24)、の三つに纏めることができる<sup>18)</sup>。特に、③の間投詞(応答詞)としての用法は、副詞を応答詞・感動詞の分化と捉える<sup>19)</sup>ならば、その原副詞的用法ともい

うべきものであり、さらに、これらが話者の直接的な心的態度の表明であることは言をまたない。後述する相互承接の規則性とあわせてこの点からも「げに」が陳述性(モダリティ性)の高い語であることが分かる。

### 四、極度・高度を示す程度副詞間の相互承接の実態

以上、極度・高度を示す程度副詞各語について概観してきたが、中古においては、これらが相互に承接し、構文上連続して用いられる用例が多くみられる。ここでは、これら極度・高度を示す程度副詞間にみられる相互承接の実態について記述し、纏める。

極度・高度を示す程度副詞間の相互承接の例は、本論文で対象とした中古作品では合計で四四七例みられる。以下に、実際の用例を挙げてみる。

25 いといたくよろこひてのたまふ。(竹取物語)

26 月のいとみじうおもしろきに。(大和物語)

27 いとゞ、いたう、くづほれさせ給へるに。(源氏物語 薄雲)

28 いとゞいみじうあはれにかなし。(蜻蛉日記 上)

29 殊に、いたうもそこなはれ給はざりけり。(源氏物語 柏木)

30 人も、いと、殊に思ひかしづき聞えたり。(源氏物語 紅葉賀)

31 ことにいと親しきことはなかりけるを。(源氏物語 夢浮橋)

32 父おとゞの、さばかり、世にいみじく思ひほれたまうて、



(源氏物語 横笛)

33 容貌はよにもよにいと多く侍らん、(宇津保物語)

34 まことにいたく泣き給へる気色なり。(源氏物語 若菜下)

35 まことに「いみじく物悲し」と、(源氏物語 橋姫)

36 まことに、いと尊くあはれなれば、(枕草子 三三段)

37 「今ぞまことに世にあらじ」と、(狭衣物語 卷三)

38 柏木は、げにいたく漏り煩ふ。(狭衣物語 卷三)

39 げにいみじう騒がしきまで人詣でたり。(宇津保物語)

40 げに、いと、いたう面やせ給へれど、(源氏物語 若紫)

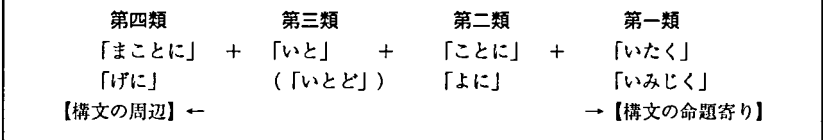
し。(浜松中納言物語)

これらの用例にみられる相互承接の実態とその数をまとめると次の表3のようになる。

表3 極度・高度を示す程度副詞間の相互承接の実態及び用例数

	用例数
いと(いとど)+いたく	168(1)
いと(いとど)+いみじく	117(5)
いと+ことに	21
ことに+いたく	2
ことに+いと	5
よに+いみじく	1
よに+いと	1
まことに+いたく	1
まことに+いみじく	8
まことに+いと(いとど)	14(1)
まことに+よに	1
げに+いたく	1
げに+いみじく	11
げに+いと(いとど)	83(1)
げに+よに	3
計	447

図1 極度・高度を示す程度副詞間の相互承接のモデル



本論文ではこの実態に基づき、構文のより命題寄りに位置するのか、周辺に位置するのかによって、第一類(「いたく」「いみじく」)、第二類(「ことに」「よに」)(本論文で直接考察の対象とはしていないが「あまりに」も含まれる<sup>20)</sup>)、第三類(「いと」「いとど」)、第四類(「まことに」「げに」)とに分類する。換言すれば、これは、語、語彙の意味の具象性の差異である<sup>21)</sup>。

即ち、第一類はより形容詞(サマ)的な語であって語彙の意味が認められやすく、第二類は形容動詞或は名詞としての性格と副詞としての性格を併せ持つ語、第三類は程度副詞としての性格のみを有する語、第四類は話者の評価副詞(陳述副詞)的な性格を有する語と位置付けることができる。

これに基づき、相互承接のモデルを示したものが上の図1である。

管見に及ぶ限り、中古においてこの規則性は三例を除いて<sup>22)</sup>厳密に保たれており、さらに、同一構文中において、図1の上段

と下段の語、「いたく」と「いみじく」、「ことに」と「よに」、「いと」と「いとど」、「まことに」と「げに」が連続して出現することはない。これは言語の経済性から同レベルの語を重ねて過剰に表現することを避けるためであり、いわば同レベルの語が衝突するのを回避するのである。

この中で特に問題となるのは、第二類である「ことに」「よに」が第三類である「いと」に先行する、一見すると規則に反することもみえる、31、33の例である。しかしながら、33の例は「よにもよに」の一例のみであり、しかもこれは「よにもよに」と反復させることによって一種の感動詞として機能して、「なんとまあ」といった訳をあてるべき例であり、除外される。また、「ことに」が「いと」に先行する31のような例は、「ことに」が有する、取り立て副詞と形容動詞という両面的な性格の内、特に取り立て副詞としての性格が強く現れたものと解釈される。「いと」の程度を極度・高度に修飾するというよりは、後続する「いと親しき」とはなかりける」を取り立てて、「特に、それほど親しい間柄ということではなかった」と解釈すべき例であろう。しかしながら、これらを除く大部分の「ことに」が第二類に属することは、表3において「いと」が「ことに」に先行する例の多さから裏付けることができる。

また、極度・高度を示す程度副詞群から一歩離れて、他の副詞との相互承接についてみて、

42 まことにさらに音せざりき。(枕草子 三九段)  
43 まことにつゆ思ふことなかくめでたくぞおほゆる。  
(枕草子 二二段)

44 げに、え堪ふまじく、泣い給ふ。(源氏物語 桐壺)

45 あえ物も、げに、かならず、おほしよるべき事なりけり  
(源氏物語 梅枝)

の如く、第四類の「まことに」「げに」は構文のより周辺に位置することが分かる。

また、この相互承接の例は、中古和文において特に多く見られるものであり、管見に及ぶ限り、中世においては殆どみられなくなるものである。これらは、中古和文の特徴的な表現である。

## 五、結び

以上、本論文では、古代語における極度・高度を示す程度副詞群、を中心にして、その機能について纏め、中古和文に特徴的な表現として、その相互承接の実態について数量的な整理を行ない、そのモデルを提示した。これらは経験的、理論的に推論が可能な事象であるが、本稿はこれを記述的に実証した。そして、この相互承接のモデルは、同時に中古における極度・高度を示す程度副詞群の体系とも成り得る。時代の推移に従い語が擦り替ることは、一つの語が長期間用いら

れることによつて程度が軽減し、より新奇な語が求められるといつた言語変化の原理一般に帰結できるが、体系全体に關して本論文で得た結論は次の三点に纏めることができる。

一、極度・高度を示す程度副詞群は、第一類から第四類、形容詞的性格の強い語から、程度副詞的性格の強い語、話者の評価副詞(陳述副詞)的性格の強い語といつた分類が可能である。

一、さらに、構文の周辺から命題内部へ向けて、第四類、第三類、第二類、第一類といつた順で相互に承接する。

一、極度・高度を示す程度副詞の体系は、この第一類から第四類での連なりの外で、第一類は形容詞に隣接し、第四類は間投詞(応答詞)に連続するといつた広がりを持つ。これは副詞一般の特質とみることができ。

なお、本論文で挙げた用例は、『九本対照竹取翁物語語彙索引』(一九八〇)風聞書房、『枕草子総索引』(一九六七)右文書院を除いて、『日本古典文学大系』による。用例中の表記(仮名遣い、句読点など)はこれに従うものである。

### 【注】

- 1 森重敏(一九五〇)「程度量副詞の設定」京都大学『国語国文』二二二一、による。
- 2 これらの語群にはこの他にも、「余りに」「いかにも」「大きに」「極めて」「甚だ」「もとも」などがある。ここで取り上げる語は用例数が多いことなどからそれぞれの段階の典型的な語であり、これらを考察することで体系全体

体を網羅することができる。

- 3 渡辺実(一九八三)「副用言総論」『日本語学』二二一〇、による。
- 4 渡辺実(一九八三)「副用言総論」『日本語学』二二一〇、による。
- 5 渡辺実(一九四九)「陳述副詞の機能」『国語国文』一八一、拙論(一九九〇)「相当度を示す程度副詞「さながら」の変遷」『広島大学教育学部紀要』第四八号、など。また、渡辺(一九七二)が陳述副詞の機能を「表現の本体は後統する部分にあり、その後統する本体を予告しそれを誘導する」として、陳述副詞を誘導副詞とされたのは、これらの語は語彙の意味が表面に現れず、専ら誘導という機能のみを表すことを示唆している。
- 6 「まことに」の例は「まこと」での用例。『古事記』『万葉集』では「まこと」の用例はみられない。
- 7 井上博嗣(一九九四)「古代語における程度副詞」清文堂、山口佳紀(一九九二)「上代における程度副詞と古事記の訓読」東京大学『国語と国文学』六九一三、による。
- 8 これらは、井上によればいずれも、「わが妻は(あなたは)その心が肉体が傷つき損なわれ痛むそれほどに(…)恋ふ(佗ふ)」としての意味をもち、「(…)」は「強く」「激しく」といった意味をもち、「(…)それほどに」がその程度をさらに修飾しているため第二次段階の程度を示すという。また、この段階では、例えば1の文であれば、「いたく」が直接修飾する。「恋らし」と、「恋ふことがいたくである」といつた主語と述語の関係をもつことができ、なおかつ、「恋ふ」の主語である「わが妻」を主語としても、「わが妻がいたくである」という論理関係を持つことができるという。
- 9 この第三次段階の程度を示す語は、それが直接修飾する語に対して、主語・述語の関係をもつ以外の意味関係をもたなくなり、純粹に程度のみを示す段階であるという。
- 10 このことは、現代語の「ひどく」に相当するという。「ひどく綺麗な花」

「ひとくくらしい」などといったプラスの状態の語とは共起しにくい点で同等の性質を有するという。

11 特に、9の例において「殊異」の字が当てられていることは象徴的であろう。

12 特には、「万葉集」の例から明らかであるが、万葉仮名からも字教からも「まこと」と読むことはできない。

13 僅かに、「宇津保物語」に一例、「枕草子」に一例、「源氏物語」に三例、「堤中納言物語」に二例、「浜松中納言物語」に二例、「更級日記」に一例、「夜の寝覚」に二例みられる。

14 井上博嗣（一九六九）「中古程度副詞「いみじく」と「いたく」の場合」『女子大國文』五五・五五六、による。

15 例えば、「源氏物語」では、終止形で述格に立つ用例は四九例と「いたく」の六例と比較しても圧倒的に多い。同様に、未然形三例、連体形一四九例、「已然形」〇例と活用形に富む。

16 例えば、「源氏物語」においては三三例が「ことなり」で述格に立つ用例であり、「こと」全二六四例の内三八例が連用中止の用例である。

17 例えば、「源氏物語」では、「まことに」全一五〇例の内、形容詞・形容動詞の直前に置かれその程度を修飾すると考えるものは三九例、残りの二二例は文全体（コト）に対する評価副詞的な用法である。

18 例えば、「源氏物語」においては、全四五八例の内、形容詞・形容動詞の直前に置かれるものは八六例、「げに」で間投詞的に用いられるものは二五例、残りの三四七例が評価副詞的な用法である。

19 森重敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房、による。

20 「あまりに」は、「あまり、いたくなよび、よしめくほどに」（源氏物語若菜上）、「いとあまりあつかはしき御もてなしなり」（源氏物語 登）「まことにあまりに、一方にしみたる心ならひに」（源氏物語 宿木」といった例から第一類に分類できる。

21 渡辺（一九四九）に、「詞の意義の具象性は大雑把に言つて、名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副用語の順に薄くなる。」といった記述がある。

22 中古におけるこの規則性に反する例外は、「いみじう、げに、書きつくしたる繪どもあり。（源氏物語）」「いとまことにうつくしう、たをやかなる気はひづるを聞く（夜の寝覚）」「いとまことにうつくしう、たをやかなる気はひづるを聞く、似るものなきはや（夜の寝覚）」の三例である。最初の例は「げに」の間投詞的な用法の例で、「なる程」といった訳を当てるべき例である。次の二例は「夜の寝覚」からの例であり、この作品の資料的な問題があり留保すべき例である。

23 「宇治拾遺物語」に「いとみじく」が一例、「まことにみじく」が二例、「寛一本平家物語」に「げにいたく」が一例、「げによに」が一例、「十訓抄」に「いとみじく」が一例、「まことにみじく」が一例、みられる程度である。

### 〔付記〕

本論考は、第四五回国語学会中国四国支部大会（於鳥取大学）において口頭発表したものに加筆、訂正を加えたものである。席上多くの先生方から有益なる御教示を頂いた。記して感謝申し上げる。

—— なかがわ ゆうじ、本学大学院博士課程後期在学 ——